

芳賀 綏 著
よしか すすし

新訂
日本文法教室

教育出版

著 者 略 歴

芳賀 綏 (はが・やすし)

1928年生まれ。

1953年東京大学文学部卒業。

東洋大学・法政大学助教授などを経て、

現在 東京工業大学教授，NHK解説委員。

(その間、西独ルール大学客員教授，慶応義塾
大学・東京外国語大学・聖心女子大学・上智大
学講師など)

専攻 言語社会心理学 (文法論・方言学・政治文化
論などの著書・論文も多数)。

著書 別表 (282～3 ページ) のとおり。

新訂 日本文法教室

定価 1700円

昭和57年11月30日 初版第1刷発行

著 者◎

芳 賀 綏

企画・編集

株式会社 信 光 社

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-32

電 話・東 京 (03) 261-9140

発 行 者

武 川 潤 平

発 行 所

教育出版株式会社

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-10

電話・東京(03)261-0191(大代表)

振替口座 東京 9-107340

印刷所 信教印刷 製本所 板倉製本

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。)

ISBN4-316-35071-4

新訂
日本文法教室

芳賀 綏著
はが やすし

教育出版

目次

はしがき

序説 言語記号と文法

1	サインさまさま	10
2	記号連結と文法	13

I センテンスというもの

1	センテンスの領域	10
2	センテンスの内容	13
3	センテンスの型——述定文と伝達文——	14

4	話すセンテンス、書くセンテンス……………	五
---	----------------------	---

II センテンスの組み立て

1	〈文節〉というもの……………	三
2	文節のはたらき——結合と断止……………	六
3	従属と統率——文節の結合のしかた……………	七
4	従属——統率の二種——修飾関係・並立関係……………	八
5	断止する文節——述語・独立語……………	九
6	センテンスの分類……………	九
7	特殊な文節——遊離語・間投語……………	一〇
8	センテンスの要素(まとめ)……………	二

III 単語の品定め

1	〈言〉と〈辞〉……………	二
---	--------------	---

IV 構文の種々相

2	言（＝自立語）の分類……………	一六
3	用言——動詞・形容詞……………	一三
4	副用言——副詞・連体詞……………	一五
5	体言——名詞……………	一六
6	断止言・間投言——感動詞・間投詞……………	一七
7	辞（＝付屬語）の分類……………	一八
8	準用辞——助動詞……………	一八
9	副用辞——格助詞・接統助詞・提示助詞……………	一九
10	準体辞——準体助詞……………	二〇
11	断止辞・間投辞——終助詞・間投助詞……………	二〇
1	凝縮と展開——連体と連用……………	二四
2	問題と解答……………	三五
3	文節の勢力範圍……………	三五

4 文節の節約と脱落 二四二

5 表現の飛躍 二四九

6 センテンスの特殊運用 二五五

結び 歴史と文化の中の文法 二六三

付表 品詞分類一覧表 二七三

索引 二八一

装 幀 山田 耕作

は し が き

日本語が乱れていると言われ、だから日本語の正しい姿を取りもとそうとも言われています。この本は、そのような声にこたえて、われわれの生活に欠くことのできない現代日本語について、その姿を明らかにする行き方の一例を示そうとしたものです。

この本で明らかにしようとしたことは、三つあります。——第一は、言語の構造のうち「文法」と呼ばれる部分を説明する論理と手法です。第二は、われわれが共有する文化的財産としての日本語の、さまざまな性格、特色です。第三は、日本語によるコミュニケーション活動に含まれる特性と限界、盲点などです。

これらのことをとらえるに際して、語句が組み合わされて形成される「意味のつながり」を主眼とし、その基本単位としての「センテンス」が起点となり帰着点となるように、全体を構成しました。

ところで、かつては、言語とか文法とかいうタイトルのついた本は敬遠されがちでした。無味乾燥、味もソッケもない語り方が多かったことも一因でした。そこで、この本では、説き方・話し方によっては、言語構造の分析にも興味をもってついていける、ということを証明してみたい

と考え、そのための工夫を試みたつもりです。

同じ意図のもとに、著者は、昭和三十七年に旧版『日本文法教室』（東京堂）を公にしています。〈百万人の文法書〉を目ざすと謳った同書は、予想を超える好評で、十回に余る重版を記録したのは著者にとって望外の喜びでした。

旧版を古本でも入手したいという読者の要望がその後も絶えぬことを知り、一部改訂して『現代日本語の文法』（昭和五十三年、教育出版）を出しましたが、今度、さらに「結び」の部分などを増補して、この『新訂日本文法教室』を世に送ることにしました。

旧版からこの新訂版までの間、多くの先学の学恩に導かれ、熱心な読者の支持のを感じながら筆を進めました。とりわけ、谷口正元氏、石井良介氏、高木四郎氏ら、練達の出版人の御配慮が重ならなければ、本にまとめ、さらに増補新訂を加える機会は得られませんでした。深い謝意を表明します。

昭和五十七（一九八二）年十一月

芳賀 綏

序說

言語記号と文法

1 サインさまさま

照明塔から投げかけられるカクテル光線に、グリーンの芝生があざやかにうつし出されて、両チーム一点をめぐってのはげしい攻防に、きょうのナイトゲームもまたいいよ白熱化して行く、——という場面です。こうなると、選手の動きの一つ一つを見のがすことのできないのはもちろんですが、両軍監督の一挙一動にもまたファンの目は吸い寄せられて行きます。コーチャーズボックスを行ったり来たりしながら、ほったをなでたり帽子のヒサシをなでおろしたり、あるいは両足をふんばってヒザに当てた手を握ったり開いたり、……人によって“静”と“動”、“緩”と“急”のちがいがいこそあれ、時にはさりげなく、時には突拍子もない、あの、一挙手一投足がなかなか意味深長なもの……、両軍監督の苦心をこらしたサインが、作戦どおりに持ち駒を動かして行くのです。

監督のセスチュアの一つ一つが、「選べ」「打て」「送りバント」「ヒット・エンド・ラン」……等々の指令を伝え、時には、「いまのは取り消す」という意思表示にもなります。中には、相手をあざむく無意味な身振りもあるそうで、サインのぬすみ合い・さぐり合いは、想像以上にはげしく、複雑なものようです。

敵をだますへ無意味な身振り」は別として、味方の駒を動かすのは「意味をもった身振り」です。意味をもった身振り——つまり、「一定の身振り」に「一定の意味」を結びつけるように、それぞれのチームの中で約束ができているわけです。

野球の場合だけではない。われわれは、小指を立てて「カノジヨ」を表し、親指を立てて「男」を意味することがある。あれも、意味をもった身振りにほかならない。——またゴー・ストップの信号は、「進め」「注意」「止まれ」の意味を青・黄・赤で示す。踏み切り番は、「安全」「危険」を白旗・赤旗で示す。こういうのは、みな「意味をもった色」です。むかし、いくさのときの合図にノロシをあげた。あれなら「意味をもった煙」です。発車の合図にベルが鳴る。あれは「意味をもった音響」だ。

こういうのは、すべて、ある約束にしたがって、一定の手段・材料（＝身振り・色・音響・煙……）に一定の意味の結びついたものです。手段・材料で意味を代表させたとと言ってもよい。野球のときに限らず、これらすべてをサイン（sign）——訳せば「記号」と呼ぶことができるのです。その種のことをシンボル（symbol）と呼ぶこともよく行われます。

厳密に言くと、「シンボル」よりも「サイン」のほうが、意味を広く取った点があります。

人間は、いろんな場合に、いろんな必要に応じて、いろんな記号を作って行くことができますが、人間の作り出した記号の中で、いちばん複雑に発達していて、いちばん便利なものは、コト。

パ（言語）です。コトバ―むずかしく言えば「言語記号」ですが、これは、人間の音声器官から出るオト（音声）を材料にして組み立てた記号です。たとえば、

〔サ・ク・ラ〕という音声の組み合わせは「桜」という意味を表す、

〔フ・ジ・サ・ン〕という組み合わせは「富士山」という意味を表す、

〔テ・ツ・ド・オ〕という組み合わせは「鉄道」という意味を表す、

というふうに、すべて、へ一定の音声^{オト}にへ一定の意味^{イミ}を結びつけるべく、お互いの間で約束が成り立っている。これすなわち「意味をもった音声（＝音響の一種）」です。

こういう記号を実際に口に出して、相手の耳に音声を送り込まなくても、頭に一定の音の組み合わせを記憶しているだけでも、へ意味をもった音声^{オト}と言えます。――実際に耳に聞こえるように声に出した場合のを「具体音声」、頭の中に記憶してあるのを「抽象音声」などと言って、区別することがあります。

われわれは、何かを表現し伝達するのに、それぞれの場合場合に応じて、いちばん適当な種類の記号を選んで使っていますが、なんといっても、へ言語記号^{言語記号}にたよって用を足していることが圧倒的に多い。ほかの種類の記号では、なかなか間に合いかねることが多いからです。早い話が、

われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

という日本国憲法の前文や、

十八世紀の大小説家井原西鶴の小説に「本朝二十不孝」というのがあります。これは中国の有名な「二十四孝」をもじったもので、よりによった親不孝者の話をならべたものです。大体、親孝行の話などは、読んでおもしろくなく、くすぐったくなるような、わざとらしい話が多いが、そこへ行くと、思い切った親不孝の話は読んでおもしろく、……

という『不道德教育講座』の書き出しのあたりを、色や音響や煙でもって表現しようとしてごらんなさい。そんなことはできるもんじゃない。

野球のサインにしたって、あそこでコトバを使ったら大変だから、やむなくとられた苦しまぎれの手段にすぎない。あれやこれやと苦心しないでも「打て!」「送れ!」と、コトバを使うことができたなら、どんなに楽かわからない。ですから、相手方に聞こえて、かまわないとき、またコトバでなければ伝えようのないときとなれば、かまわず声に出して、「突っ込め!」「行け行けっ!」といった指令が出されていることになります。

2 記号連結と文法

ほかのいろんな記号に比べてはるかに便利な言語記号は、第一、数の多いことにかけて、ほかの記号とは雲泥の相違があります。日本語だけでも、何十万という言語記号を、われわれは持つ

ています。——すなわち、われわれはコトバによって何十万かの概念を区別していることになります。

ところで、われわれが言語記号に負わせている役目は、概念を区別することだけではないのもちろんです。——われわれは、始終、心の中に思ったことを、だれかに向かって（あるいは、時に独り言として）語り、ます。

こんな天気にかの家の中ゴロゴロしてゐるなんて、もったいない話だな。

こう暑くちやたまらないや。ナイターにでも行つて夕涼みするか。

というように。さっきの日本国憲法にしても、『不道德教育講座』にしても、幾多の概念を組み合わせてもろもろの複雑な思想を語つてゐるのにほかならない。——実にそのときこそ、わが言語記号のはたらきどころです。われわれが、事件なり思想なり感情なりを語ろうとするとき、そのとき、必ず、前もつて頭の中に記憶され、あるいは辞書にのせられてゐる言語記号がとり出されて、実地に使われるのです。

いわば、われわれは、個人個人が何かを〈語る〉ために、あらかじめ、社会共有の財産として、言語記号をたくわえておく、といったかっこうです。

さて、われわれは、〈語る〉に際して、言語記号をどのように使つてゐるのでしょうか。——いまの例でもおわかりのように、「語る」ためには、いくつかの記号を〈つなぐ〉のが建前です。

2 記号連結と文法

中には、

打て！ 突っ込め！

アウト！ セーフ！

JOAK.

といった、一個だけで語る（とまで行かなくても、告げる・叫ぶ）例もありますが、ふつうは、二個以上を連結して使うことが多く、それには、

ちよいと待っとくれ。

どうも、たいへんけっこうなお話で……。

程度の、わりに短い連結から、長くなると、エンエン数万言をついやす大演説というような、無数の連結を積み重ねた超長大編成にいたるまで、さまざまです。

このように、記号をいくつもつないだものを（記号連結）とも呼ぶとすれば、無数の記号連結を作れるというのは、コトバだけの特徴です。——交通信号の青・黄・赤なんかは、バラバラにいたり消えたりするだけで、二つ以上つなぎ合わせてまた別の意味を表すということはない。野球の場合だと、“カギサイン”とかいうのがあって、二つ以上のサインを組み合わせて、複雑な合図をすることがあるそうですが、連結の長さ・複雑さにかけては、もちろんコトバの場合とは比べものになりません。